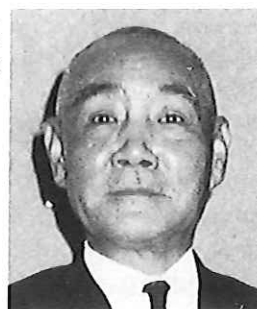




日本カイロプラクティック総連盟(JCA)誕生 初代会長に伊藤緑光氏

First President : Ryotsuko Itoh
(Term 1961 - 1963)



Ryotukou Itoh
(1901-1991)

Unity was Achieved
業者団体初の大同団結

Coalition : Formation of the Japanese Chiropractic Association(JCA)

創立の過程

昭和36年(1961)の夏、岸田菱山、堤啓護、保坂岳史、伊藤緑光、中島美翠の5名は、全国にあるカイロ団体を統一し、横の連絡を密にして将来のカイロ業界の発展の基礎づくりをする点に意見が一致し、早急に各協会に呼びかけるべく代表者会議を開くことになった。

同年10月4日、創立総会が菊水会館・浅草に於て開催され、これに賛同した7団体約33名が集まった。

参加団体は日米カイロ協会(伊藤緑光会長)、関西カイロ協会(長井幸男会長)、日本カイロ協会(松本茂会長)、日本カイロ医連盟(岸田菱山会長)、全日本カイロ協会(保坂岳史会長)、山形カイロ協会(斉藤利雄会長)、日本カイロプラクティクス協会(吉田盛豊会長)。討議の結果、統一団体の名称を全日本カイロプラクティック総連盟とし、初代会長に伊藤緑光氏が就任することになった。この大同団結が各協会にスムーズに受け入れられ、短期間に結成されたことは時期のよかったことに加え、発起人の指導力といえよう。

総連のスタート

全日本カイロプラクティック総連盟の第1回役員会は三崎神社(神田)に於て開かれ、新しい団体の役員人事、団体賦課金、事務所などの決定と組織造りが図られた。むろん当時の状況からみて無理な点もあったことは見逃せない。

たとえば各協会の長に副会長をお願いするとか、所属団体の会員10名に対して1名の理事を出すことで7名の副会長と35名の理事が生まれる事態もおきたりしたが、これは安産のためのやむおえない処置であった。それよりも曲りなりにもみな協力のもとに統一団体ができた点に注目すべきだと思う。

昭和37年(1962)2月竹谷内米雄氏を会長とする東京カイロ協会が正式に加盟して総連の加盟団体は8団体となる。

活動の開始

昭和37年3月4日、総連はハワイから大福国靖ドクターを迎えて白雲閣(池袋)で実技指導を含めるはじめての講演会を開いて好評をえた。

同年4月12日第2回役員会が精養軒(上野)で開かれ、全加盟協会長、全在京理事、地方理事数名も加えて、カイロ学会の創設、総連の基本技法制定などが真剣に討議され、人事の交流もあわせて大きな盛り上りをみせたのである。10月にはハワイカイロ界の長老山本英雄ドクターによる講演会を白雲閣(池袋)で開催好評であった。大福ドクターに続き山本英雄ドクターを迎え、日系人とはいえ海外のカイロプラクティクスを総連として迎えたことは、かつてないことであった。

日本カイロ総連盟の加盟団体は新しく香川カイロ協会が加盟し、日本カイロ医連盟が日本カイロ連盟と改名し合計9団体に成長した。この頃先に可決された基本技法の制定が再討議され、小林勝治委員長を中心に各協会長はそれぞれの技法を公開するよう懇願したが、結果的に全日本カイロ協会のみが提出したため、これを総連の基本技法として採択、次の総会で了承を求めることになった。

定時総会 JCA Convention (30頁につづく)

回	年 月	会 長	会 場	備 考
創立	1961年10月4日	伊藤 緑光	東京・浅草菊水会館	団体加盟制でスタート
2	1963年3月21日	伊藤 緑光	東京・全国町村会館	
3	1964年2月17日	草 彌 大山	東京・全電通労働会館	基本技法を採択
4	1965年2月24日	草 彌 大山	東京・浅草公園「福島」	
5	1966年2月20日	草 彌 大山	東京・東京柔道整復専門学校	ナショナル大学東京講座主催を決める
6	1967年3月3日	草 彌 大山	東京・東京柔道整復専門学校	加入団体11団体
7	1968年3月3日	竹谷内米雄	東京・東京柔道整復専門学校	統一カイロデー主催
8	1969年3月23日	竹谷内米雄	東京・東京都勤労福祉会館	団体賦課金7500円(年額)に改定

2代目会長に草薙大山氏

Second President : Taizan Kusanagi

(Term 1964 – 1967)

昭和39年(1964)2月17日、第3回総会(於：全電通労働会館)が開かれ、2代目の会長に草薙大山氏が選出された。また全日本カイロ協会の技法が保坂岳史氏を長に白石嘉三氏、小林勝治氏によって公開され、総会はこの総連の基本技法として正式に了承し以後の研究会で採用されることになった。

昭和40年(1965)2月浅草寺本堂に於てカイロの先駆者懸壺法要が遺族を招いて成大到に挙行された。2月24日第4回総会を盛会に終了。4月8日峰村寅雄氏を会長とする千葉カイロ協会が加盟し受理された。

この頃、竹谷内米雄副会長からナショナルカイロ大学のジョセフ・ジェンシー学長を招いて、国際カイロ講座を開催したいとの話があり、真剣な討議の末、最大のカイロ団体である全日本カイロプラクティック総連盟が主催することに決定、竹谷内米雄副会長を実行委員長に実行委員会が結成された。

またカイロ学会創設も討議されたが難問もあり、それに代わり月例研修会が実施されることになった。

第5回総会を前に突然理由なく日米カイロ

協会が脱会し、新しく藤川淳敏氏を会長とする藤川整形外科カイロ協会が加盟した。

同年11月ナショナルカイロ大学東京講座が予想を上回る盛況で3日間開催され、実行委員をはじめ関係者の努力が報われた気持ちで大変な喜びであった。

第6回総会において、米国の姿勢週間を総連でも実施する案が提出され、保坂岳史副会長に具体案が一任された。また岸田菱山副会長が全療新聞創刊20周年祝賀行事の協力を要請したため、祝典を全療新聞主催、カイロ技術競技会を総連が主催することになった。

同年4月木村順二氏を会長とする北陸カイロ協会が加盟。この秋に第2回国際講座である国際ペインコントロール研究講座が開催されることになり、草薙大山会長を実行委員長とする実行委員会が結成され準備に移った。同年11月、国際ペインコントロール講座が米国のペネル・ホイザー両講師を招いて盛大に開かれた。

昭和43年(1968)1月研究会の精勤者に表彰状が授与された。同2月中島美翠氏を会長とする関東カイロ協会が総連に加盟。



Taizan Kusanagi



3代目会長に竹谷内米雄氏

Third President : Yoneo Takeyachi

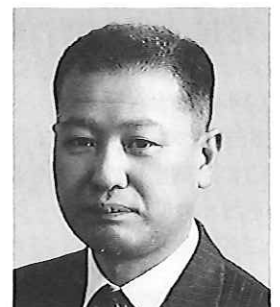
(Term 1968 – 1969)

同年3月3日、第7回総会(於：東京柔道整復専門学校)が開催され、3代目の会長に竹谷内米雄氏が就任した。総連の名称が全日本カイロ総連から現在の日本カイロプラクティック総連盟に改名されたのもこの時であった。

この頃月例研修会場が東京勤労福祉会館に移され、増加する受講生に備えた。新しく山田新一氏を会長とするオリエンタルカイロ協会、安原岩夫氏を会長とする旭川カイロ協会、塩川満蔵氏を会長とする手技整形カイロ研究会の3団体が加わり、総連傘下の団体は15団体に成長した。それまで各協会で行ってきたカイロデーをこの年から総連を中心とした

統一行事とすることが決まり、その第1回目を9月15日芝の増上寺会館で盛大に催した。はじめての統一カイロ記念行事とあって全国から230名の業者が集まり、各界名士の祝電をはじめ芸能人も加わって盛会を極めた。

11月4日、米国のパーマー大学よりストラング・ヒルデブランド両教授を迎えて日米交歓会を開いた。同じく11月、山形カイロ協会は東北カイロ協会と改名して承された。昭和44年(1969)9月、2回目の統一カイロデーを東京勤労福祉会館で挙行し、同年11月第2回ペインコントロール日本講座(於：全理連ビル)を主催した。この講座は京都でも行なわれ大成功をおさめた。



Yoneo Takeyachi
(1906–1975)



1968年当時の役員 JCA officers
(circa 1968)

第1回日本カイロプラクティック・セミナー1965

ナショナル大学東京講座

1st JCA Chiropractic Congress Tokyo 1965

Awakening Experience for Dr. Janse's Lecture



Dr. Janse's lecture captured the minds of all attendants

社会に対して何かの特権を望むのなら、責任を伴うのです

ちょうど30年前、第1回目の国際セミナーが開かれた。講師はナショナル大学のジェンシー学長。先生の開会の挨拶を再読すると、当時の模様が立体的によみがえるだけでなく、色彩をともしない空気まで感じられる。以下、再現してみる。

私が今回、かくも多数の皆さんの前に講師として招聘されましたことは、私の一生の歩みにおきまして、一つの歴史的な意味を持つものであります。

ここにお集まりの皆さんも私も、共に同じ道カイロプラクティックに携わるものでございます。従ってどちらが教え、

どちらが習うというものではございません。私が知っておりますことが多少でも皆さまのお役に立てば、それだけで意味があるわけでございます。

けさ程から、国会の諸先生方、前厚生大臣のご臨席を頂きましたこと、これはなぜかという、私どもが携わっているカイロプラクティックというものが、国民の健康増進、医療の一面に極めて大きな働きを示している証拠に他ならないと思うわけでございます。従いまして、このような信用と申しますか、このような絶大なる声援を政界、官界の皆さまから



Welcome to Japan, Dr. Janse

贈られたということは、ここにお集まりの皆さまや私がもっております責任が極めて重いということを今さらながら認識しなければならないわけでございます。従いましてこのような重い責任を自覚しつつ、この三日間のセミナーにベストをつくして参りたいという覚悟を決めているものであります。

さて私どもがアメリカでやっておりますカイロプラクティックと、日本でやっておるものとの間に、かなりの相違があるのではないかと存するわけでございます。

これは三日間のセミナーでお互いの意見が交換開陳されておのずと分かることであると思うのです。しかしながら、例えやり方が違っても、国民の健康保持又は増進に寄与するという根本的な立場は、国境によって違うものではないわけでございます。従いまして、今朝ノ



未経験で初の本格的な国際セミナーに実行委員は緊張

すべてが初体験で緊張の連続

Behind the scene, everything was a new experience.

日本カイロプラクティック総連盟が結成され、初の国際講座を体験した。理事会では、カイロ界の国際的権威、ナショナル大学ジェンシー学長の招聘の機会を喜び、日本の最大のカイロ団体である総連盟が主催団体として受けて立つのが国際的礼儀との結論に達した。とはいえ、全く未経験な国際講座のこと、役員の緊張は張りつめ、竹谷内米雄実行委員長をリーダーに準備のための会合が何度も行なわれ、予行練習から観光の下見まで念には念を入れた準備が進められた。

ほどここに醸し出されておりますように、友好の雰囲気と国民の健康に対する我々の役割に対して、立派な代表からよせられました付託に応えるような勉強をして参りたいと思うのであります。

もし私たちが社会に対して何かの権利、特権を獲得しようと望むのであるならば、それは当然責任を完うしてのみ私どもは社会に対して特権又は権利を求める資格を生ずるわけでございます。

医学治療の学問というのは、人間が考え出した技術の上では最も崇高なものであります。なんとなれば、生命のプロセスは極めて複雑であります。従って、複雑なものを、より解明するように、よりこれを一般の人に役立つよう努力することによって、社会からの尊敬を勝ち取る資格が生ずるわけであります。

今日、常に新しい知識が研究開発されており、私どもが自分の向上を図りますためには、新知識に対し危惧の念を感じてはならないわけでありす。

さて、この治療と申しますものは、残念ながら万能薬はございません。どういう治療をしたら、確実に病気が治るということはありません。仮に病気を全てこの世から駆逐したとしても、私ども人間はいつか死ぬわけでありす。それまで、より痛みを軽減し、より充実した生活を送れるよう努力する。これは医療に携わる人、普通の医師でも、ここにお集まりの皆さまも区別はないのです。

同じように、共に痛みを軽減し、より快適な生活を送れるようにするということに関して、そこには区別のあろうはずがないと信じるのです。



Dr.J.Janse at his technique demonstration

時期が熟したときに到達した考えほど強いものはない

フランスの文豪ビクトル・ユーゴーは「ああ無情」の中でこう言っております。「時期が熟したときに到達した考えほど強いものはない」。私はこの道に長くおりまして、最近カイロプラクティックに関して世間の関心がとみに高まってきたことを自分の目で見ておりまして、このユーゴーの言葉に打たれるのであります。今回来日する前に、オーストラリアやヨーロッパで講演を行ってきたわけでありす。そこでは普通のお医者さんがカイロプラクティックに関してますます興味を示しているのであります。日本に着てこれほど同じ関心を持つ皆さまを見ますと、心暖まる思いと同時に、世界的にカイロプラクティックの時代が到来したという感を持つわけでありす。

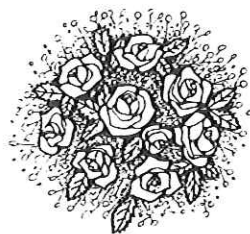


旧日本青年館を会場に開かれたナショナル大学東京講座 The seminar attracted people from all over Japan.

第4回日本カイロプラクティック・セミナー1970

ナショナル大学東京講座

4th JCA Chiropractic Congress Tokyo 1970



3 百名を集めた開会式 Opening ceremony

参加者は心から堪能

カイロプラクティックの世界的な権威ジェンシー学長（米ナショナル大学）をお迎えして11月14、15日の両日、今までにない内容の充実さと、3百余名という記録的な受講生を集めて、東京平河町の全共連ビルで開かれた。主催者側は長期の準備と青年執行部をもって当たり、スムーズな運営ぶりは多数の参加者を喜ばせた。

開講の辞を荒井延尚理事長、日米国歌吹奏に続き、竹谷内一恵新会長が「カイロを発展させるのは我々以外にないとの強い自覚を持ち、常に国民の支持を意識に入れ、着実に研究を重ね、個人的には謙

虚に、団体としては強く結束しなければなりません」と挨拶。

来賓の藤井尚治先生は「医学界の長老ルネ・デュボス先生は『人間と適応』という本の中で、個々の病因よりも人間の病気を決定するのは環境である。抗生物質が多量に出回っているが病気はそれをはるかに上回っている。病気を治すには直接取り除く方法と自然治癒力を補強する方法がありますが、結局最後は後者でしょう。あらゆる形態が旧態依然として

いる中で若い力、燃えるような活気は貴重なものです。ライシャワー氏が日本の本当のおもしろさは戦後だといっていました。だが、実際に伝統は認めるが新幹線のようにまったくあたらしくセットされたものから明日が生れてくるのでしょう」と語った。



熱心な受講生 People tried to absorb as much as they could

プラクティック大学第2

COLLEGE OF CHIROPRACTIC TOKYO SEMINAR



Dr. Janse making a speech

ソ連のパプロフ研究所から帰国したばかりの東京教育大学名誉教授・杉靖三郎先生は「私は43年前に大学を卒業し、東大の物療内科に入った頃から東洋医学を研究し、現代医学がいかに偏っているかよく知っている。日本の医学界が漢方もカイロも取り上げていないのは残念なことである。私がカイロに初めて接したのは15年前、アメリカに行ったときです。それ以来カイロプラクティックの理論的根拠がしっかりしていることも、実際に効果があることも分かっている。日本の医療界は混沌としているが、皆さまは人類の健康のため新しい道を切り開いてもらいたい」との力強い励ましのお言葉を頂いた。

講座をふりかえり基尚道実行委員は次のような記録を残した。

講座は過去3回の総連主催国際カイロ講座の経験を十分に生かし、何回かの実行委員会で役職分担、会場、宿泊、広告、招待、通訳など綿密な打ち合わせが行なわれた。講座当日は、準備万端の甲斐あって大きな混乱もなく、ジェンシー学長による科学的なカイロ理論の解明と芸術的ともいえる手技、そして人間味あふれる話術とがエネルギーに発露され、3百余名を心から堪能させた。



カイロプラクティック東京講座開く



ジェンシー学長が講義 5年前の感動ふたたび



マスコミでも取り上げられた



東京教育大名誉教授
杉靖三郎先生

全国療術師協会理事長
宇都宮義真先生



Dr. ジェンシーのテクニック、デモンストレーション
Dynamic demonstration by Dr. Janse

カイロプラクティック 75周年記念パーティー

Celebration of 75th Chiropractic Anniversary

第4回セミナーはちょうどカイロプラクティック誕生75周年記念の年であった。カイロが誕生して4分の3世紀を経過、その年に再びジェンシー学長を迎えられたことは全日本のカイロ業者にと

って大きな喜びだった。総連は業界の長老も招き盛大なカイロプラクティック誕生75周年記念祝賀会を開いた。会場には、当時のカイロ業界のリーダー全員が集まりお祝した。



芸者で歌手の赤坂小梅さんもお祝いに参加



Koume Akasaka, famous singer and many colleagues joined the celebration

右から
松本 茂
塩川満蔵
藤川淳敏
竹谷内米雄
中島美翠
竹谷内一恵
大越勝衛

教養講座

Seminars: Broadning the Scope of Knowledge

Orthopedics, Sports Injuries, Neurology, Psychiatry, Ethics



田園調布クリニック院長 田辺 蔵先生

第1回教養講座・学術シンポジウム
ストレス・精神医学・神経学
1980年6月29日 日本都市センター
藤井尚治先生「ストレスとカイロ」
田辺 蔵先生「日常の臨床医学」
伊藤不二夫先生「神経医学的に見た
カイロの効果」

1st Clinical Seminar, June 1980
Stress and Chiropractic
・ Naoharu Fujii, M.D.
Clinical Observations in Daily Practice
・ Iwao Tanabe, M.D.
Neurological Validation of Chiropractic
Effectiveness ・ Fujio Itoh, M.D.

藤井先生は科学の語源から説明し、ギリシャ医学のコス派の特異性とクニドス派の非特異性の違いが今日の考えにつながると指摘。田辺先生は精神医学はうらみ、つらみの医学で、抑圧されているため病気が起こると説く。伊藤先生はカイロなどは外治法で、薬は内治法で役割が違う。気のとどころり、気滞が病気の原因で、気を注ぎ込むことの重要性を語った。



東京都老人総合研究所 佐藤昭夫先生

第2回教養講座
JCA創立20周年記念特別講演
1981年3月29日
日本都市センター
講師 佐藤昭夫先生
体性一自律神経反射

2nd Clinical Seminar, March 1981
Somato Autonomic Reflex Study
・ Akio Sato, M.D.,PhD

佐藤昭夫先生は、基礎医学の立場から「体性一自律神経反射について」講演。この分野は運動神経反射に比べて、研究が遅れていたが、最近かなり研究が進んできた。自律神経の中核は常時緊張してトーンスを維持しているが、このトーンス維持に体性感覚器から体性感覚神経を介して常時中枢神経系に伝えられる情報が、恐らく中枢のトーンス維持に重要と思われる。



日野厚先生の栄養学の講義

第3回教養講座
1981年6月21日
日本都市センター
講師
笠原正三先生 レスリング
日野 厚先生 栄養学
竹宮 隆先生 運動生理

笠原先生はスポーツは家庭の理解と幼児期が大切でスポーツを通じ社会に貢献する楽しさを説き、日野先生は独自の栄養学の解説。竹宮先生は生理学者の立場から健康とストレスについて詳しく解説、リラクセーションを配慮した生活設計の必要性を説いた。



レスリング金メダリスト
笠原正三先生



筑波大学教授 竹宮 隆先生

3rd Clinical Seminar, June 1981
Methods of Training
・ Shozo Kasahara,
Olympic Wrestling Gold Medalist
Importance of Nutrition in Health
・ Atsushi Hino, M.D.
Modern Physiology in Health
・ Takashi Takemiya, PhD



内科医 日野 厚先生

Nutrition, Office Management, Chiropractic Principles & Practice



第4回教養講座

総会記念講演

1982年3月21日

日本都市センター

心療カウンセラー

世和玄次先生

「治療家の心がまえ」

世和玄次先生はニセ者が氾濫する中で、本物の治療家になれ、と会員を叱咤激励した。

4th Clinical Seminar, March 1982

Good Patient Approach as a Clinician

• Genji Seiwa



帝京大学医学部教授 岩倉博光先生

第5回教養講座

1982年6月

日本都市センター

帝京大学医学部教授

岩倉博光先生 整形外科

「臨床的に見た痛みの鑑別」

藤山孝一先生 整形外科

「膝の疾患」

痛みについて2名の整形外科医から解説があり、会員はその奥深さに感銘。

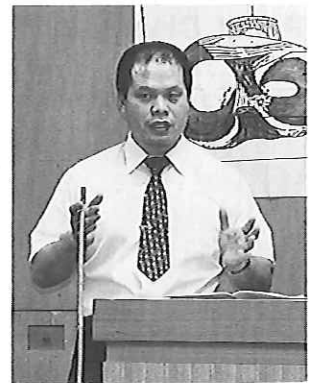
5th Clinical Seminar, June 1982

Low Back Pain Management

• Hiromitsu Iwakura, M.D.

Management of Knee Joint Dysfunction

• Kouichi Fujiyama, M.D.



藤山整形外科 藤山孝一先生



第6回教養講座：実践臨床講座

1982年9月26日 日本都市センター

講師 堀肥左夫先生 望診学

村松仲朗先生 カイロ経営学

竹谷内一恵先生 カイロ理論

6th Clinical Seminar, September 1982

Observation in Clinical Practice

• Hisao Hori

Office Management in Practice

• Tsugio Muramatsu

Application of Chiropractic Principle

• Kazuyoshi Takeyachi, D.C.



堀肥左夫先生



第7回教養講座

1983年6月

講師 ランド・スエenson先生

Rand S. Swenson, D.C., PhD

若き秀才、ランド・スエenson博士は研究のかたわら、サブラクセーションとその臨床的意義について分かり易く教えてくれた。

7th Clinical Seminar, June 1983

Principles of Motion Palpation

• Rand Swenson, D.C., PhD





第8回教養講座
1984年7月
日本都市センター
放送大学教授
講師
平沢弥一郎先生

Professor
Yaichiro Hirasawa
Hoso University

平沢弥一郎先生は過去40年間に約35万人の足の裏を測定し、世界で初の身体静止学を発表。人間が立つことの意味を豊富な研究データに基づき解説した。足の裏にもっと注目すべき有益な講義だった。



法制化問題でパネルディスカッション1984.7

Panel Discussion on Chiropractic Legislation



山田善一（よしかず）氏は1981年、JCAの顧問弁護士に就任。1984年7月会員を前に、法制化問題に関するパネルディスカッションを行なった。

プロフェッション、いわゆる知的職業としてのカイロプラクティックを確立するためには、後継者の養成である教育と社会的な認知を受けるための広報活動、この二つが是非必要。法的には昭和35年の最高裁の判例が生きているので、一律にカイロを禁止することはありえない。カイロの有害性を反対者は主張するが私もカイロの賠償制度に関与して分かったことは、カイロによる事故は非常に少ないということ。

国民の立場に立つ行政なら、カイロをすぐに法制化し、一定の有資格者のみに業務を認め、その水準に達していない人には業務をさせないことが必要です。前途は厳しくとも、JCAのいまの方針を継続することが大切だと思います。



顧問弁護士 山田善一先生
Lawyer Mr. Yoshikazu Yamada

1981年にJCAの顧問弁護士に就任して以来、山田善一氏は、会員のために、無料法律電話相談を行なっている。



保険請求実務のセミナー

第9回教養講座

1985年5月

愛知県産業貿易会館

講師 (株)ジック代表取締役、

安田火災、大東京火災保険代理店

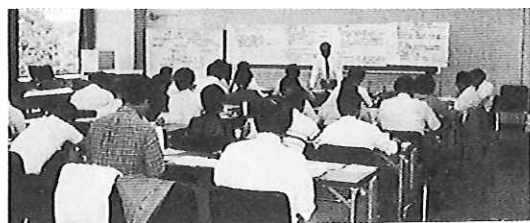
尾崎靖亮氏

1. 自賠責保険請求手続きの実務

(1)交通事故査定におけるカイロ療法の認識

(2)自賠責保険の任意保険

(3)自賠責保険請求の仕方と問題点



教育委員会 JCA Education Committee

1977

1977年度の教育委員会



1979

2月4日



1982



1992



教育の抜本見直しの必要性からJCAは最初の教育委員会を1972年（委員長・荒井延尚）に設立。1977年にはDCによる教育委員会に改編され、竹谷内宏明氏が委員長に就任。その後、通信講座テキストづくりを主事業に、カイロの定義など教育の基本にまで踏み込む討議を行なった。委員の交代はかなりあり、現在は1992年に就任した吉橋昌厚委員長のもとで8名のMD、DCがRMITの教育に関して取り組んでいる。RMIT大学との協力関係樹立で教育委員会の役割は今までにないほど高まった。

Within the JCA, education has always been a high priority. In 1977, an education committee made up of D.C.'s was formed and future plans were made. To commence a systematic educational program for certification of members was the next step. Various members had different licences and backgrounds, yet they had one thing in common, an interest in chiropractic. It has not been an easy road, for the work was basically voluntary, and there were as many dropouts as newcomers. In 1984, the education committee adopted a definition of chiropractic based on international standard and made chiropractic textbooks for certification program. In 1992, it was revitalized and in 1994 it gained the momentum when the successful negotiation with RMIT University was achieved.

1993



1994



左から、五十嵐由樹、竹谷内伸佳、ブライアン・バジェル、竹谷内宏明、吉橋昌厚、竹谷内一愿、中塚祐文

系統教育(通信講座)の開始

JCA Chiropractic Certification Program Starts

1968年より74年までのJCA教育は月例研修会であった(32頁参照)。一貫性のない講習は次第にマンネリ化し、また講習はテクニック偏重であったため、それぞれの資格(柔整、鍼灸、指圧)にカイロ・テクニックを加えるのが一般的であった。受講生にカイロプラクターとしての自覚を求めるのは無理であった。

JCAとしては、カイロ業界の土台を作る必要に迫られていた。それにはカイロプラクター養成に必要な、基礎からのカイロ系統教育を始める以外になかった。1976年3月、名古屋での理事会で「カイロ技能認定」の実施を決め、その準備のため1977年、竹谷内宏明氏を委員長とするDCによる教育委員会を発足させた。

系統教育は常設校が常識であったが、全国組織としてのJCAは、特定の地域に常設校を設立することは、公平さや、資金的にも難点があった。そこで採用されたのが「通信講座」であった。通信講座は、自宅で教育委員会作成のテキストや副教材を学んで、毎月のスクーリング(面接授業)で復習と試験を受けるのが基本的なシステム。スクーリングは各支部が担当し、全国にカイロ教室が10カ所ほど設置された。その後、集中講義やテキスト改定などがあり、通信講座もJCAカイロ学院と名称変更された。初めての系統教育の責任を負わされた教育委員会はどのような科目を取り入れ、誰が何を担当するか、期間は、スクーリングは何回、受講生数の予想などから、作成資

料の著作権の帰属、委員会内部での通信講座の意義の再確認など検討課題は山程あった。1978年3月の第6回教育委員会までには内容と規模が次第に明確になってきた。

1977年1月通信講座受講資格試験ともいべき、第1回初級試験が全国6カ所で行なわれた。その3年後、1980年3月第1回中級試験が東京、名古屋、鹿児島のカ所で行なわれた。

教育委員会が作成した最初の教材が全国の受講生に送られたのは、1978年9月であった。ナショナル大学・ジェンシー学長のご協力でJCAは同大学教材の著作権を無償で譲り受け、通信講座テキストの内容をハイレベルなものにした。その後の資料作成・配布、各地でのスクーリングは順調に進み、受講生数も130名を越えた。

通信講座は初級(試験のみ)、中級コース、上級コースの事実上2段階からなり中級で基礎知識を学習し、上級でテクニックを中心にした臨床を習う。テクニックは種類を絞り、マスター出来ることを最優先した。そして最後の上級試験に合格すると「JCA認定カイロプラクター」として登録されるシステム。JCAに入会しないと受講できないため、通信講座はJCAの大きな魅力ある教育事業に成長しただけでなく、支部にとっても活性化の材料として役立った。

系統教育は知識だけでなく、その中に魂を入れることが重要だった。1979年に

JCAのポリシーと5つの基本政策が採択され、その後JCAの羅針盤となった。

JCAのポリシーとは「自分を活かし、人(患者・仲間)を活かす」ことであり、そのため全人性(人間性、知識、技術の三位一体)と自己実現(主体性の確立)をめざし、もって医療人(カイロプラクター)としてのカイロプラクティックの社会化、科学化、国際化をめざそうとするものである。JCAはヒューマンウェア(全人性・自己実現)を最も重視した。

1976年3月に系統教育実施を決めてから2年7カ月の準備期間を経て、79年に中級、81年に上級コース、そして82年に最初のコース修了認定者誕生と、困難を克服しての系統教育作りは、後の業界活動の柱になった。

・5つの基本政策(1979年)

- (1)教育の充実—全人性カイロプラクターの育成
- (2)基準の確立—カイロプラクターの認定、教育内容基準の設定
- (3)業界づくり—カイロ専門家によるJCA指定治療院制度とその普及
- (4)研究の推進—カイロプラクティック学術・研究・討論の場
- (5)普及活動—国民へ正しいカイロプラクティックの普及

・JCAの3つの基本理念(1985年)

- (1)カイロの国際化
- (2)カイロの科学化
- (3)カイロの社会化

For many years, chiropractic was taught through apprenticeship. Until the 1970's the main activity of the JCA was a monthly technique workshop. However, the JCA became aware of the need of education that teaches from the basic to the clinical level. In 1976, the JCA Board decided to establish a new educational program to lead to JCA certified chiropractors, for the JCA thought that chiropractic must be in the hands of chiropractors. In those days most chiropractic practitioners were bone setters, masseurs and acupuncture therapists.

In 1977, the Education Committee was formed which was made up of American trained D.C.'s. Standard textbooks and uniform examinations were developed. At the beginning it was a two year self-directed learning course, later it became a three year program. Technique and diagnostic procedures were taught on weekends. Most students were experienced practitioners and it served the purpose in the 1980's. However, as the program accepted new students without any experience, it was no longer able to meet the needs of the neophytes.

認定カイロプラクターの誕生 JCA Certified Chiropractors

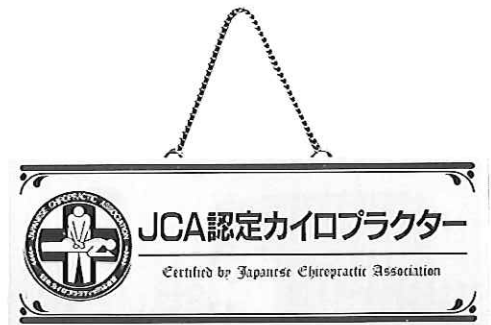


1982年5月、通信講座の初級、中級、上級コースと各試験をクリアした最初の認定カイロプラクター27名が誕生した。

認定試験はアメリカのカイロ大学卒のDCからなるJCA教育委員会が行ない、43名中27名が合格。第21回総会で認定証授与式を行なった。これら第1期生は今後、通信講座の講師やカイロ学会での研

究発表などカイロ界での指導的な役割が期待された。

認定者を代表して、松本清徳氏は「全人的な人づくりを目指す通信講座」「本物のカイロを通信講座で基礎から学ぶ」という言葉に共感して勉強に耐えたこと、「その人の人生は、よき師、よき教えにめぐり会えるかで決まる」とJCAでの



JCA会員の誇り
JCA認定カイロプラクター

縁に感謝する謝辞があった。

竹谷内宏明教育委員長は、通信講座の目的の中で大切なのは、共通な言葉で語れる仲間を作ること。その第1歩が踏み出せたことは、今後の学会や研究、教育に大きな弾みとなり、諸君はカイロが真の学問として日本に根づく先頭に立って欲しい、と語った。

JCAカイロカレッジ設立への挑戦

JCA initiated the plan to create a college that will advance to CCE standard, 1988



第1回カレッジ構想委員会、1988年7月24日
左から竹谷内(一)、村松、竹谷内(伸)、村上、角野、守屋の各氏

JCAは1984年より通信講座以降の教育計画として、カイロスクール準備委員会をスタートすることになった。しかし通信講座が順調なうちに先を見通した改革を行なうのは困難だった。1987年、竹谷内会長がロンドンのカイロ・サミットに出席して、世界のカイロ教育は国際標準化に進んでいるのを知って、1988年、JCAにカイロカレッジ構想委員会を新設、村松副会長を委員長に任命した。JCAもいよいよ新しいコンセプトで国際

社会に適用するカイロカレッジ設立に向け真剣に取り組むことになった。

1989年、村松氏の会長就任にともない、カレッジ設立委員会の委員長に竹谷内一恵前会長が就任。竹谷内委員長は89年夏に渡米し、CCE基準に合致する大学設立の可能性や米国のカイロ大学の協力体制を調査。同時に国内では用地の確保、専門家との協議、資金の調達方法などを検討した。

カレッジのソフト面の準備として、教科書として使用される本の執筆、翻訳も積極的に手がけることになった。すでにコックスの「腰痛の診断と治療」、クロフトの「ムチ打ち症の診断」などが出版され、欧米で高い評価を受けている重要書籍の翻訳交渉も進んでいた。

未経験なことには役員の思惑も交差。1989年7月、カレッジを6年制にする合意を決め、それは将来の目標として次善の策から暫時レベルアップする現実派と

対立。理想派は休眠中の繊維社団法人を買い取り、それをカレッジ運営母体とする案を進め、それを危険視する現実派との亀裂は決定的になる。社団の是非を争点に1992年4月、会員に信を問うことになった。その結果、現実派が支持する竹谷内宏明氏が会長に当選。新会長はDCによる教育委員会を復活し、新たな教育委員長に吉橋昌厚DCを任命、カレッジ構想の継続を指示した。教育委員会は定期会合を開き、広く意見交換をしながらカレッジ実現を模索。オーストラリアのRMITに、教育委員長らが外向き教育提携の話しを進めた。JCAカレッジ計画は当初の案より一層進展し、RMIT大学が卒業生に学位を授与し、将来的にはDCに匹敵する国際標準レベルの卒業生を出す大きなプロジェクトに成長した。

JCAの悲願は国際的な協力を獲得し、当初の会合から7年目にして実現する大きなステップであった。

卒業教育 Postgraduate Education

SOT



講義はまずスライドを使ってSOTの基礎を説明するところから始まりました。今まで分からなかった基本的なことが理解でき、非常に参考になりました。3つのカテゴリーに分けた理由も納得できました。それによりケースに応じた治療法を開発できたこと、治療をパターン化したことが優れた点だと思います。カテゴリーを決定するための検査法と実習に移りましたが自分のものにするまで容易でないと同時に、今後の治療が楽しみです。(関昌由)



講師 小柳泰博DC
Yasuhiro Koyanagi, D.C.

AK



AKは難しく考えていたのですが、講義内容が分かり易いので、スケールの大きなAK学を具体的に学ぶことが出来て大変に感謝しています。AKを展開したグッドハートのカイロに対する情熱と絶えない研究心が中塚先生の講義から伝わってきます。AKの構造、化学、精神のトライアングルを通じて自分を大きくして行きたいと考えます。(三浦正之)

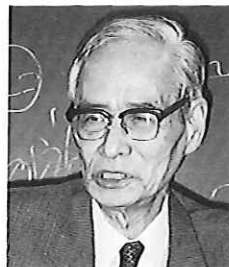


講師 中塚祐文DC
Hirofumi Nakatsuka, D.C.

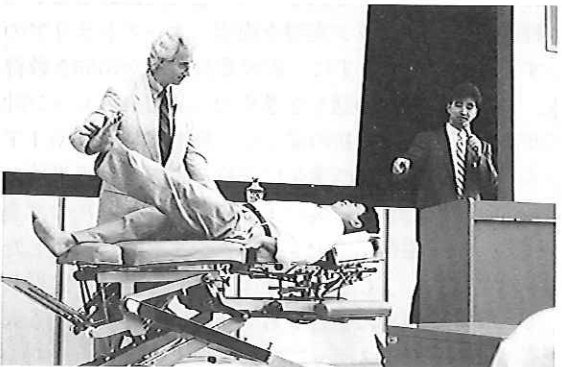
生涯学習 Continuing Education



日本の生理学会の長老で、ストレス学の重鎮、東京教育大学名誉教授・杉靖三郎先生によるJCA生涯学習が1992年10月25日、神田で行なわれた。人間は組織や臓器やの部分の機械的に結びつけたものでなく、複雑な歴史を持ち、心とからだのまとまった固体として応答する。今日科学的な正統医学だけでは現代の病気に対処出来なくなった。東洋医学の心身一如を再考させてくれる講義だった。



東京教育大学名誉教授
杉靖三郎先生
Dr.Yasusaburo Sugi
Professor Emeritus



マフェトンのAKセミナー

Dr.P.Maffetone of ICAK presents seminars in Tokyo & Osaka June 1994

アメリカのICAK会長を迎えて本場AKセミナーが1994年6月、東京と大阪の2ヵ所で開かれ、各会場には百名を越す熱心な受講生が集まった。東京では「内臓疾患へのAK的アプローチ」。大阪では「スポーツ障害へのアプローチ」で共に好評だった。



出版物 Publications

日本でカイロプラクティック関係図書が出たのは30年前、1969年ジェンシー著の翻訳本「カイロプラクティックの理論・応用・実技」(科学新聞社出版)が最初であった。

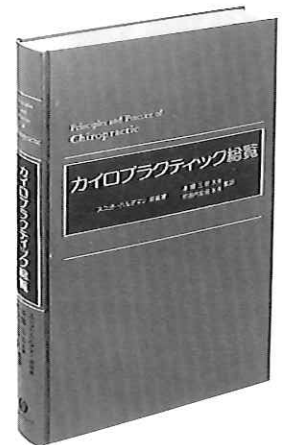
70年代に海外のカイロ大学留学生在が続々と帰国し、80年代になるとDCによる翻訳、著作によるカイロ出版物は急増した。そのほとんどはカイロ初心者向けのテクニック・セミナー補助テキストとして出版された。内容はテクニックや検査、治療面の解説書であった。

JCAでは1989年に本格的なカイロプラクティック・カレッジ設立を決めてから、将来の学校教育の教材として使える海外第1級のテキストの翻訳発行を始めた。この実績が意外にも豪州RMITの注目を呼び、充実したテキストの存在が日本校開校に大きな役割を果たすことになった。開校後は学生のニーズからレベルの高い教材需要を生み、その後は毎年1冊のペースで翻訳発行され、現在8冊目になる(表を参照)。

カイロ業界には幾つかの定期出版物があるが、この方面でもJCAが最も古く、抜きでている。「JCAジャーナル」は181号を数えるし、一般向け「カイロニュース」は112号になる。学術誌の「臨床カイロプラクティック学会雑誌」は8巻1号。かつて日本カイロプラクティック学会が名古屋で開催された頃、「日本カイロプラクティック学会誌」が何号か出版されたことがあった。

その他各団体の会報関係を除く定期刊行物は、カイロの情報専門誌で年3回発行される「セサモイド」、CCJが発行する翻訳情報誌「カイロプラクティック・レポート」などがある。

カイロ業者が増加した1980年代末にカイロ周辺メディアの第1号として科学新聞社が年4回の「カイロジャーナル」を発行。1996年には日本医科学出版が年6回の「カイロタイムス」を発行。いずれも新聞形式である。手技療法に範囲を広げた定期出版雑誌には、エンタプライズ社が年4回発行する「マニピュレーション」と谷口書店が発行する月刊「手技療法」がある。カイロプラクティックが過去20年間、大きなマーケットに成長したことの証明でもあった。



Publication of books on chiropractic has increased from the 1980's as a reflection of market demand. It should be noted that key chiropractic texts, including Haldeman's Principles and Practice of Chiropractic, Bergman's Chiropractic Technique, Cox's Low Back Pain and Foreman's Whiplash Injuries, Gatterman's Subluxation and Chiropractic Management, Yochum/Rowe's Essentials of Skeletal Radiology etc have been published in the Japanese language. Translation of those major text books provided a very real strength in terms of knowledge for students at RMIT Japan Unit.

毎年海外の第1級学術書を翻訳する

書 名	編 集 者	発行年月
腰痛 Low Back Pain	コックス	1988年3月
ムチ打ち症の診断	クロフト	1989年3月
カイロプラクティック総覧	ハルデマン	1993年12月
テクニック総覧	バーグマン他	1995年1月
カイロ・マネジメント	ガタマン	1996年2月
サブラクセーション	ガタマン	1997年3月
神経筋骨格系障害の臨床評価	グリーンスタイン	1998年3月
骨・関節の画像診断 4巻	ヨーカム・ロー	1999年5月

解剖実習 Anatomy Lab

東京医科歯科大学

Tokyo Medical and Dental University

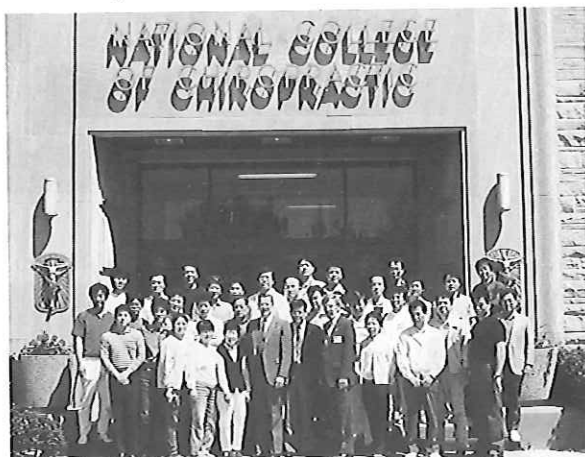
To augment clinical knowledge, anatomy lab was conducted at Tokyo Medical and Dental University between 1981-1988 and at National College between 1988-1993.



教養講座と並行して会員から、より専門知識へのニーズが高まったため、1981年より東京医科歯科大学・佐藤達夫教授のご協力で毎年、同大で解剖見学（約2時間）が実施され、1988年以降はナショナル大学での集中解剖実習（約50時間）へと発展する。佐藤教授は医科歯科大学では人気の教授。気さくでJCA会員の希望を快く引き受けて下さった。先生は「手当という言葉がありますが、これは文字通り昔、病人に手を当てたんだと思います。手を加えること、これは外からでも中からでも、どちらからにしても体のことを知らなければならないわけで、医学生の場合、約2百時間解剖実習を行ないます。皆さんの場合、外から見えないところを探るという点で高等な技術だだと思います。それだけに人体の内部を知りたい要求が強いと思いますし、毎回熱心な参加者がいる理由だと思うわけです」。献体への黙祷から始まり、熱心な見学実習が行われた。



アメリカのカイロ大学で50時間の集中解剖実習 ナショナル・カイロプラクティック大学 Anatomy Lab at National College of Chiropractic



1988年5月14～23日、角野団長の引率で第1回解剖実習参加者33名（女性4名）はナショナル大へと旅立った。参加者の飯野俊男氏は「ナショナルの受け入れ態勢が万全なのは、驚きというほか有りません。今まで学んできた学問は平面的な理解しか出来なかったものを、カイロを立体的にとらえ、解剖しながら観察出来る喜び、無我夢中で6日間が過ぎました」。野沢勝子先生は「米国研修で、如何にJCAの存在が高く評価されているかを知りました。感謝の気持ちで一杯です」。

As the JCA educational program expanded, there was an obvious need for a laboratory in which to study anatomy, one of the bases of chiropractic practice. Anatomy labs were conducted at the Tokyo Medical and Dental University from 1981 until 1988. Thereafter, anatomy was studied to a much more extensive degree at the National college of Chiropractic in 1988, 1990, 1992 and 1993.

1st Anatomy Class Tour June 1988



2nd Anatomy Class
Tour May 1990

総勢34名で第1回を上回る52時間の解剖実習。朝8時から夜9時までのハードスケジュール。一本一本の神経、筋肉に関心が集まる。解剖実習はあくまでドラマチックなのだ。最後は試験も受け、平均は95点だった。



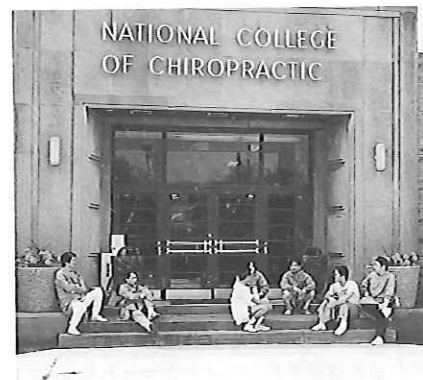
3rd Anatomy Class
Tour July 1992

初めのうち解剖実習はホルマリンの臭気との戦いながらの作業となりました。解剖学の本のように筋肉、神経、血管が整然となっているのに感動を覚えました。内臓の奇形や病変など見たときの驚きと感動。素晴らしい体験でした。（杉山哲也）



4th Anatomy Class
Tour July 1993

自分にとって2度目の解剖実習の参加でした。少人数ながらびっしり5日間勉強しました。過密スケジュールにもかかわらず、いつもナショナル大の先生方のご親切には感謝します。留学生もお招きし、楽しい打ち上げをしました。（小川武久）



法制化への努力

Legislative Efforts: The Struggle for Recognition

カイロプラクティックは法的に療術に含まれるため、全国療術師協会が法制化運動の中心であった。行政側は昭和23年以来医業類似行為の禁止措置と自然消滅・転業政策を図ったが、JCAは、カイロは国際的に認知された職業、有効有害で独自性ある治療法、立法は行政上の解決策、自由開業者の増加の観点から、国民のためにも日本でのカイロ立法の必要性を厚生省に訴え続けた。



1970



内田厚生大臣 ジェンシー学長と会見

Minister of Health and Welfare, Mr. Uchida meets with President Janse. Nov 16, 1970

ジェンシー学長は訪日挨拶のためカイロ業界指導者とともに内田厚生大臣ならびに熊崎事務次官、医務局長らと面会。アメリカにおけるカイロプラクティック事情を説明した。



内田厚生大臣(左)とジェンシー学長(右)▶

1982



根本元厚生大臣との懇談

根本龍太郎元厚生大臣 ジェンシー学長と会談

Former Minister of Health and Welfare Mr. R. Nemoto discusses Chiropractic with Dr. Janse November 1982

ジェンシー学長は竹谷内会長、全療協幹部と根本龍太郎元厚生大臣を訪問、カイロの法制化を陳情した。



根本元厚相(左)とジェンシー学長(右)▶

1984



阿久根参議院議長(左)とアルナルド学長(右)

アルナルド学長、 阿久根参議院議長 斉藤邦吉元厚相を訪問

NCC President Arnolds meets with Chairman of The House of Representatives, Mr. Akune and former Minister of Health and Welfare, Mr. K. Saito. Nov. 18, 1984

左からアルナルド学長、全療協・島崎専務理事、松本茂理理事長、JCA竹谷内会長、斉藤邦吉元厚相 ▶



1989



JCA幹部は小泉厚生大臣に カイロ法制化を陳情

JCA President Muramatsu and Immediate Past President K. Takeyachi Meet with Minister of Health, Mr. Koizumi to explain the need for chiropractic legislation May 15, 1989

村松会長らは小泉純一郎厚生大臣にカイロの早期法制化を陳情



右から小泉厚生大臣、竹谷内閣顧問、村松会長、角野理事長

日本カイロ協議会で行政対策を協議 1985~91



Meeting of Liaison Committee

Liaison Committee by four Chiropractic Associations was established to meet legislative inquiries

1985年2月27日、全国療術師協会、JCA、PAAC、日本カイロ協会の4団体代表が集まり、カイロに関する行政当局への業者側統一見解、カイロ批判グループへの対策協議のため、日本カイロプラクティック協議会を創立した。カイロプラクティック制度化の条件として「カイロの必要性、独自性、有効性」の基本理念を話しあい、小冊子にまとめ関係者に配布した。カイロを誰にやらせるべきかの理由づけは、各団体で行なうの教育にもかかわり結論に至らなかった。

1989年11月、カイロ協議会4団体の代表は、厚生省を訪れ医事課幹部との話し合いの中で、厚生省はカイロ問題を整形外科医からなる「医学的研究班」に委託していること、1990年にカイロ側代表を招いてのヒアリングを行ないたいと述べた。1991年に提出された「医学的研究班」報告書はカイロに対して厳しいものであった。それを根拠に厚生省は、各都道府県衛生部に「医業類似行為に対する取り扱いについて」の通知を発送。危機感を抱いたカイロ諸団体は「カイロ連」結成に動く。



Members meet with the executives of the MHW 日本カイロプラクティック協議会(4団体)と厚生省医事課との会合 1989年11月

1991

業界代表が厚生省の宮島課長、遠藤課長補佐と協議



1991年6月、厚生省の宮島医事課長と遠藤課長補佐とカイロ諸団体代表の会合が開かれ、厚生省側から業界に対し、事故防止、誇大広告の規制など自主規制を徹底するよう要望が出された。

業界側からは、それに呼応する対策を立てる約束と、さらにカイロの法制化に向け公正なカイロ調査を行なうことを要請した。

Representatives of the profession meet with executives of the Ministry of Health and Welfare on chiropractic issues. June 13, 1991

カイロプラクティックに対する厚生省の見解

Attitude of Japanese Ministry of Health toward chiropractic in 13 years

—— 過去13年間の変遷 ——

1986年

- ・日本整形外科学会の泉田会長は、厚生省が同学会に依頼したカイロの有用性と安全性について次のように答申。①カイロにより50例以上の損傷が発生し、医師以外の者が行うのは危険。②カイロ理論は医学理論と合致せず、その効果は疑わしい。

1987年

- ・日本整形外科学会は前年の厚生省答申を補足するため、カイロの被害例を全国から集め厚生省に提出。

1989年

- ・厚生省の丸山医事課長、本田課長補佐は日本カイロ協議会（JCAら4団体で構成）との会談で、①今後カイロへの風当たりは強くなるだろう②厚生省の従来の方針に変化はない③カイロ業界内部で自主規制を進めて欲しい④現在整形外科医によるカイロ調査・研究を検討している。

1990年

- ・厚生省の本田課長補佐は、カイロについて一般論でいうと、①危険性のあるものは禁止または免許制度になる②カイロと類似療法の違いを明確に（作用機序）③有効性の立証、の必要性を説く。
- ・厚生省の宮島医事課長は、①カイロの業者がまとまること②類似団体のとの調整③カイロが何をしたいのか、説明を求める。
- ・厚生省はカイロの問題を3つの観点からとらえている、と語る。①法律制度②医学的・科学的立場③利害を異にする団体との調整。

1991年

- ・厚生省は厚生省委託研究班「脊椎原性疾患の施術に関する医学的研究（三浦教授ら8名の整形外科医で構成）から

答申を受ける（通称三浦レポート）

- ・厚生省はカイロ療法について、「有効性が現時点では明確にできない」としてカイロ手技の危険行為を禁止し、誇大広告を規制することを決め、都道府県衛生部に通知。
- ・厚生省はカイロ諸団体に対し、研究報告はカイロの全面否定ではない。厚生省通知は国民の健康と安全を守る立場で、規制や指導はしないと説明。
- ・厚生省はカイロ諸団体に対し、①あはき団体の圧力が強い②それらとカイロの技法上の違いを明確にして欲しいと要請。
- ・厚生省は、あんま団体から厚生省通知は手ぬるい、もっと厳しくとの批判を浴びる。
- ・厚生省（政府側）はあんま団体の要請で「カイロの取り締まりに関する質問状」（堀利和議員）を受ける。

1992年

- ・厚生省（政府側）は官沢総理の名で堀利和参議院議員（社会党）の質問状に回答。
- ・あはき業を代表して堀利和参議院議員（社会党）は厚生委員会で「カイロを国民の立場から取り締まるべき」と政府委員（厚生省）を詰問。
- ・あはき団体はカイロ取り締まりを求めて、衆参両院議長に陳情書を提出。
- ・厚生省の園田政務次官とWFCディエム会長らが会談。CCJは三浦レポートへの反論文書を提出。
- ・厚生省課長が、日本カイロプラクティック連絡協議会（通称カイロ連）設立総会に出席。

1993年

- ・厚生省はカイロ連より「カイロの必要性・独自性・有効性」小冊子受ける。

1994年

- ・あはき団体は「カイロ・整体等は『あ

マ指』と同名同質であることを確認し、カイロ等の立法化に絶対反対し、これらを『あま指』に吸収する。このため委託研究機関にその同一性の科学的立証を依頼する」と発表。

- ・あはき団体は「カイロ等非合法無資格類似行為の取り締まりを求めて法廷闘争も覚悟」と発表、厚生省に陳情。

1995年

- ・あはき団体は、東京に2千人の会員を集め「カイロ等無資格者取り締まり」を求め厚生省と国会に陳情デモを行った。
- ・あはき団体の「カイロ等無免許者の取り締まりの請願書」は参院厚生委員会で可決され、参院本会議でも採択された。

1996年

- ・あはき団体は、カイロを一定の条件のもとに手技療法として、あはき師法の中に包み込む「手技療法師法」の検討に着手。厚生省の見解は、「手技療法は多岐にわたっており、定義づけは難しい」。

1997年

- ・WFC世界大会を東京で開く。スエニー会長らが厚生省を訪問。
- ・厚生省はカイロ財団推進グループから財団申請を受ける。

1998年

- ・厚生省はカイロ財団の是非をめぐる対立グループ双方の陳情を受ける。
- ・WFCのスエニー会長、チャプマンミス事務総長は、日本でのカイロ教育コンセンサス会議のあと、厚生省を訪れカイロに対するWFCの見解を説明。

1999年

- ・厚生省はJCAとJAC共同制作の「あ・は・き」手技療法師法案反対の小冊子を受けとる。

JCA賠償制度、17年間の記録

Malpractice Insurance Record Demonstrates "Safety"

最近、一般常識では考えられないような医療事故が続発し、それに伴い、医事紛争訴訟は増加傾向にあり、1997年に提訴された件数は595件と過去最高を記録し、10年前より70%増加している。また係争中の訴訟を含めると現在、約2700件の訴訟が進行中で、100人に一人の割合で医師が裁判に巻き込まれている。

私達カイロプラクティック関係者も、日常手技という治療行為により、直接患者と接触していて、それらの医療ミスは決して他人事ではない。故意に事故を起こす人はいなくても、人間の行為に絶対の安全は無く、細心の注意をもって治療活動に取り組む必要がある。

JCAが賠償保険に加入した昭和56(1981)年12月から平成11(1999)年11月までの18年間に、保険金支払いの対象となったのは、正会員、つまりJCA認定カイロプラクターに限っては僅かに5件のみであって、幸いに決して増加の傾向にはない。そして、その内の一件は、まさに金銭日当の言い掛かりとしか解釈できないような事件で、賠償保険の必要性を痛感させられた。

最初の事故は昭和61年4月に発生したもので、賠償保険制度が発足して4年4カ月後のことであった。患者は35才の男性で、背部痛を主訴に正会員の治療所を訪問し、腰部治療直後から腰痛が増強したと訴え、事故査定委員会は有責と判断し、保険金を支払い示談解決した。施術者は矯正が少々強過ぎたと反省していた。

2例目の事故は1例目から5年後の平成3年6月に発生した。患者は47才の男性で、腰痛を主訴に認定カイロプラクターの治療を受けた直後から腰痛が増強し、某医に入院したケースである。この件も有責と認め、示談解決した。

3例目は平成4年4月に発生したもので、患者は47才の女性、主訴は腰痛、上肢のしびれであった。正会員の治療を受けた直後に前胸部、背部の疼痛が出現したが、その症状が改善するまでの医療費を支払うことで解決している。

4例目は平成5年に高額な請求で民事裁判に持ち込まれたケースで、4年間に35回の口頭弁論の末、和解金を支払うことで決着した。患者は治療を受けたのが

43才の時、46才の男性である。14回の頸椎のアジャストメントを受けてから、突発性難聴、耳鳴り、眩暈、平衡感覚異常、異常発汗が出現したのはカイロの治療が原因であり、更に三浦レポートで禁じられている、急激な回旋伸展操作による矯正を行ったためと、何と治療後3年3カ月経過して訴えてきた。患者が述べている諸症状は客観的に証明が困難で、また回旋伸展操作はしていないとの反論にも拘らず、東京地裁は患者の主張を取り上げ、民事裁判となった。そして結局患者の主張する諸症状とアジャストメントの因果関係の立証はされないまま和解で終了した。

5例目は平成6年8月の事故で、患者は50才の女性である。殿部の疼痛が主訴で治療を受けた直後に症状が悪化し、腰椎捻挫の診断で入院したものである。このケースも示談解決している。

幸いに、5例とも重大な症例にはつながらず、示談解決して、いずれも患者のその後の経過は良好であったが、民事裁判の件だけは誠に後味の悪い、納得のし難い事件であった。

JCA、公益活動に3,200万円寄付

Total of \$200,000 for Research and Special Projects

JCAは会員向けの活動だけでなく、広く視野を広げ、海外でカイロプラクティックに重要な出来事があれば積極的な経済支援を行ってきた。それは常に海外のカイロ業界と同じレベルでものを見ようとしていたからだ。例えば、アメリカカイロ業界の重大事だったウイルク裁判の支

援やカイロ百周年祭への寄付、WFCではWHO共同企画の寄金、研究基金、その他日本の災害や公益事業にも経済支援した(次項参照)。その金額は30年間で3,200万円に達する。JCAの公益活動を重視する姿勢が海外からの信用を得ることにつながった。



阪神淡路大震災対策に寄付



ディエムWFC会長にWHOマニュアルの寄付



財団法人研究財団のカイロ研究に寄付



佐藤昭夫博士の体性-自律神経反射研究に寄付



香港のカイロ法制化緊急募金に寄付